

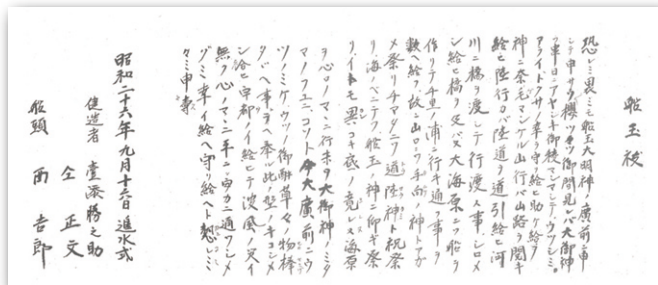
「桁打瀬船」

鹿児島県出水市

「うたせ網」漁は、出水をはじめ、不知火海一帯で行われてきた。約300年前、大阪の堺方面から伝わったものとされている。「けたうたせ網」は、木の枠に鉄の爪を取り付け、海底を引き、「トリ貝」を獲るところからはじめ、その後、現在に至るまで、主に「エビ漁」を行っている。漁期は、11月から3月、早朝6時から夕方4時までの操業時間となっている。

昭和30年から40年代にかけて、木枠の鉄製化、帆の形式の変更、焼玉エンジンからディーゼル機関への変更等、大きな改良が行われた。現役の漁業者によれば、この頃が「けたうたせ網」の最も華やかな頃であり、集落内では、祭りや行事が盛んに行われていたとのことである。

行事の一つに「エンヤナー」というものがあった。航海の道標として、沖の洲に松の木を埋める際、青年部が「エンヤナー、エンヤナー」の掛け声で作業を行い、沖での作業が終わると、年少者は、海に落とされ、泳いで帰ってくるものである。



船霊祭祀(お祓い)

【参考資料】「不知火海の風物 けたうたせ 打瀬網漁」(平成2年 出水市立出水商業高校 永井教諭編著)



操業風景

漁業者には、恵比須信仰(大漁祈願)、金比羅信仰(休漁し懇親会を行う)、船霊(漁船に船霊様を祭る)といった祭祀、また、船に酢(酢味噌もだめ)を持ち込まない、梅干の種を捨てないといった禁忌がみられる。